

「無彩色の森」読者の感想（抜粋要旨のかたちで）

■「読み終わってため息です。なにかものすごいものを読ませていただいたという感じ
です。まず、タイトルがいいなと思いました。そう、これは木ではなく森の話です。主
人公の波城の目を通して様々な人々の生と死が丹念に描かれていて、一種の群像劇とし
て一人一人が大きな存在感をもってそこに登場している。彼ら一人一人、何か無縁であ
りながら無縁でない、不思議なつながりのようなものが感じられるのは何故でしょう。
ちょうど、森の下に流れている伏流水のように、死とか、人生とか、そういうもので繋
がっている感じがしました。物語は、当初は人間のエゴとか、弱さとか、いやらしさと
か、そういうのが次々に描かれ、何か地獄めぐりのような様相を呈していますが、終盤
に近づくにつれ、それらが一つの終局に向かって収斂していく感じは、さすがに手慣れ
た感じがします。読後に無彩色の意味についてあれこれ考えさせられました。死を心に
抱いて、憎しみとか、欲望とか、愛とか、哀しみとか、そういうものを殺ぎ落として透
明になった人々の姿、そういうものだったのかなという気がしています。ほとんどの登
場人物が自ら命を絶つような形で人生を終わらせるけど、そこに悲惨さをあまり感じな
いのは、それぞれの心に青空を感じるからでしょうか。そこが自殺と自死の違い、死に
際してその心にあるものが闇か青空か、そういうことなのかなと思いました。ともあれ、
決して読んで楽しい小説ではありませんが、ずっしりと何かが胸に残る小説でした」
(秦野市 K. I 氏・文芸同人)

■「いただいた電子版、プリントアウトして2日で完読しました。大ボリュームなの
で時間をかけてゆっくりと思ったのですが、お話の展開が面白くあっという間に読んで
しまいました。互いに想いつづけてようやく一緒になれたこのカップル。急いで死なな
くても良いのではないかと思いました。波城はこの世の中を生き抜く力を持った人間だ
し、最愛の人を看病して健康にしてしまうハッピーエンドはありませんか？ ともかく
最後はあっけなかったけど、小生の知らない世界をいろいろ見せてもらえるとても面白
い小説です。また読み返します。有難うございました」(武蔵野市 T. S 氏・団体理事)

■「人生においては、現実的には老醜の中で病苦にのたうち回って死ぬわけですが、
「救い」「一条の明るさ」がどうしても必要と思われてなりません。波城が残された奥
さんなどにきちんとした配慮をしていくのはいいですが、また美佐さんと砂絵が波城の
心の内を理解していくところは救いですし、紫乃が最期を少し彩ってくれる華やかさ
を見せてくれますが、どうしても気持ちは無彩色の森に迷い込んでいってしまうのです…
いや、読者に、ひとりの人間として、生まれてきて、生活してきて、最後には生と死の
極の選択をしなければならない、いや結局はそれを結論できずにあっという間に世界と
決別していく人間であることを考えさせる…。これこそつまり私のように迷いに迷うの

が、作者の狙い通りだ！と言われればそれまでですが（笑）…。さあ他の読者はどう読まれるでしょう。（中略） 否定ではありません。「迷い」です。

しかし、「無彩色の森」は、実に多くの世界を見せてくれました。作者が集大成の作品として、全てを描く！ことに集中した作品。特に、日常から自分で自分を追い出した後の世界、そこに生きる多くの人びと。また、一つの男女が送るある現状、たくさんのその日を生きる人びと、今も純な気持ちで生きる女性、などなどなど…。これは「無彩色の森」という本題がありながら、あまりにもごった煮の、さまざまな色彩や匂いがあり過ぎる世界を見せてくれました。たくさんの場所で、それぞれの生活、喜怒哀楽に渦巻かれながら、生きる確かな人びと。これらの人の登場と描写は、一方では本書の魅力になっていると思います。この筆力には圧倒されます。今までこのようなタッチで多くの人間を、丁寧に手に取るよう理解できるように描いた作品を読んできませんでした。そう、私には思われます。（八王子市 M.Y 氏・同人誌主幹）

■ 2023年現在、もっとも読んでいただきたい作品です。上梓出来なかったことが悔やまれてなりません。筆者記す